

# 教材から読書を広げよう

静岡県沼津市立大岡小学校

小谷田 照代

## 1 はじめに

今年、国民読書年であり、読書に関する話題がメディアをにぎわすと感じている。

さて、新学習指導要領の国語科では、言語活動の具体例として、読書に関して、一、二年生「物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書くこと」三、四年生「紹介したい本を取り上げて説明すること」五、六年生「本を読んで推薦の文章を書くこと」が挙げられている。

今後は、今まで以上に、国語科の中で、読書の授業が取り入れられることになる。

ここでは、子どもがすすんで読書するようになるために、読書の時間を与えるだけでなく、より積極的な働きかけの方法を今までの実践から紹介していきたい。

## 2 教師のブックトーク

教材のテーマから子どもに興味関心に合わせて本を薦める方法の一つとして、ブックトークがある。ブックトークは、あるテーマに沿って本を紹介するが、教科書教材は、テーマがはっきりしているものが多いので、一度紹介したリストに、新しい本を加えていけばよりよいものができる。

小学校では、「友だち」「不思議な話（ファンタジー）」「家族」「昔話」「詩」「戦争」などがテーマとして考えられる。また、その他「環境」「生き方」「科学」や「実験」などに関するテーマでも行える。

一番最近のブックトークを紹介する。実際は、書名、一口紹介の後、本文から何行か抜粋して行う。

六年生「生き方」(伝記)

○『いのちのバトン』（日野原重明 ダイヤモンド社）

九十八才の現役医師の詩といわさきちひろさん絵による、いのちについてのコラボレーション。

○『夢のひとつぶ』（左近蘭子 世界文化社）

真珠の養殖に成功した御木本幸吉の一生を書いた絵本。

○『ローザ』（ニッキ・ジョヴァンニ 光村教育図書）

アメリカの歴史の中で最も有名な人物の一人「ローザ・パークス」のバスボイコット事件を描いたノンフィクション。

○『未来のきみが待つ場所へ』（宮本延春 講談社）

小中と劣悪ないじめを繰り返され、成績はオール1の落ちこぼれ。家庭内暴力と貧困に苦しみ、死ぬことも考えた作者の物語。

○『自分をそだてるのは自分―10代の君たちへ』（東井義雄 到知出版社）

東井義雄先生の小学生・中学生に送る講演会記録集。

教材に関連してブックトークを行うときは、子どものつばやきを丹念に聞きながら行うと、より本への共感性が高まる。

今回は、六年生になってから読んだ伝記の内容や、共感した部分などを発表し合いながら読み進めた。

また、本を紹介するときには、一文でどんな内容なのかをはっきり表すことを教えるようにしている。これは、子ども自身が本を紹介するときに参考となる。

### 3 子ども同士で、話すだけの本紹介

ブックトークを何度か聞くと、子どもは、「本は人に紹介されると、より読みたくなる」ことがわかってくる。そこで、子ども同士のブックトークもできる。その導入として、「話すだけ」の本紹介が有効である。

「読書郵便」や「本の帯」などは、書いて



紹介するものだが、これは、書くことに苦手意識のある子どもも、とても意欲的に取り組み、読書への意欲が喚起される実践である。方法は、

- (1) 単元の最後に、教材に関連した本を見、童数分用意し、その中から選書する。
- (2) 話す内容を決める。内容は、①本のあらすじ ②一番心に残った箇所 ③感想に絞る。
- (3) 紹介する側と、紹介される側の二手に分かれ、紹介される側は、自分の気に入った本を選んで、そこで紹介してもらう。
- (4) 紹介された本は、そのまま借りて読み、一週間後には、自分の感想を伝える。

この方法は、自分の紹介で友だちが本を読んでもくれた喜びと、同じ本を読んで感想を共有できた喜びとが味わえるものである。

### 4 友だちに読み聞かせしよう

友だちに紹介する方法で、低学年で実践しやすいのが、読み聞かせである。低学年には、「昔話」や「民話」教材があり、また学校図書館で本が揃えやすいので、比較的簡単にできる。また、本番までに、家庭で練習するために家族への読み聞かせも行うので、保護者から称揚をされると、練習にも一層の励みとなるようである。

### 5 友だちに書いて紹介しよう

多読が進み、書く力も付いてくると、「原稿を書いて紹介する」実践もできるようになる。方法は、

- (1) 単元終了後、同じ作家の本を教師が簡単に説明する。
- (2) 読みたい本を選ぶ。
- (3) 紹介カードを作成し、紹介する。

作家を意識する四年生以降に実践すると、読書の幅が大きく広がっていく。

### 6 終わりに

筆者は、子どものころ本来出会うはずの本に出会わず、やっと大人になって読むことができた。教師として、子どもと本の繋ぎ手になりながら、子どもが出会うはずの本に出会わないのは、大人側の責任だと痛感している。貪欲に吸収する子どもに、読書のきっかけさえ与えれば、自ら本に手を伸ばす子どもになるというのが、実践から得たものである。いつまでも「子どもと本の繋ぎ手」となるために、実践を重ねていきたい。

こやた てるよ 新採から読み聞かせを毎日続け、前任校で司書教諭としての実践を開始。二〇〇九年度より、沼津市立大岡小学校司書教諭。